

Safety Report

セーフティポ 高齢者

シニア層のドライバーに映像を使って
安全運転を身につけてもらう

シニアドライバーズスクールは（一社）日本自動車工業会（以下、自工会）、（一社）日本自動車連盟（JAF）、（一財）全日本交通安全協会が共催し、警察庁、国土交通省、都道府県警察本部等が後援する安全運転実技講習会である。対象は50歳以上のドライバーで、講習を通して自分の運転を振り返り、体験から得た気づきを今後の安全運転に役立ててもらおうことを目的とし、平成30年度は全国各地で48回開催。指導はJAFのインストラクターが担当している。

昨年10月17日、鴨居自動車学校（神奈川県横浜市）でシニアドライバーズスクールが実施され、15名が受講した。この日は半日コースでカリキュラムは以下の通り。

- ・いきいき運転講座
- ・運転の基本
- ・交差点講習
- ・パイロンスラローム
- ・急ブレーキ体験
- ・先進安全自動車の体験

最初は教室で「いきいき運転講座※」。今回は他のドライバーの運転行動を観察し、「自分の運転を振り返る」というトレーニングを実施した。まず、「止まれ」の標識がある見通しの悪い交差点を通過していくクルマの映像を受講者に見せる。15台が通過したが、そのすべてが停止線の手前で止まっていない。映像が終わると、インストラクターは受講者に「停止線の手前で止まらないと、どのような危険がありますか?」「このような交差点でヒヤリハットしたことはありますか?」

か?」と問いかけ、自分の日頃の運転を振り返ってもらおう。

「ドライバーが停止すべき場所で止まらないのは急いでいる、止まっているつもりになっていることなどが挙げられます。しかし、見えないところから現れる歩行者や自転車と接触する危険があるので、停止線の手前で止まる必要があります」とインストラクターが補足した。

実技は「運転の基本」から始まる。インストラクターが日常点検、正しい乗車姿勢、クルマの死角を説明。その後、「いきいき運転講座」のおさらいとなる「交差点講習」へと進む。受講者は各自のクルマを運転し、見通しの悪い交差点で出会い頭事故を防ぐための多段階停止を身につける。多段階停止とは、停止線で止まるだけでなく、自車の存在を交差する道路を通行するクルマなどに知らせるため、交差する道路に車体前部を20cm程出して停止、そこから徐々に前進して左右を目視確認できる位置で停止するというもの。受講者は教習所内のコースに設けられた見通しの悪い交差点を2回通過。今年度からは、クルマの停止状態をカメラで撮影し、指導に活用している。1回目は受講者自身の感覚で多段階停止を行い、その際、インストラクターがタブレット端末に表示される映像を受講者に見せ、自分の感覚で停止した位置が実際とどの程度違うかを確認してもらい、アドバイスを加える。それをもとに、2回目は適切な位置で停止できるようにしてもらおうのである。

全員が2回目の走行を終えると、インストラクターが「今まで多段階停止をしなくても、事故を起こしたことがないという方もいるでしょう。しかし、交差する道路を通行するクルマや自転車のほうが気をつけていたから事故にならなかったかもしれない。出会い頭事故を起こさないようにするためには、多段階停止を実践することで自分から安全を確保していくことが大切です」とアドバイスした。この日、チーフインストラクターを務めた池田幸平さんは「日頃からお客様がイメージしやすい指導を心がけています。『交差点講習』に映像を取り入れたことで、お客様が運転席にいながら自車の停止位置を客観的に確認していただけます。これによって、お客様の気づきを促し納得性が高まり、より具体的なアドバイスができるようになりました」と話す。今回初めて受講したという76歳の男性は「多段階停止では停止線ピッタリで止めたつもりでしたが、映像を見せられて実際はそうではないことがよくわかりました。これから年をとるごとに反応が遅くなるので、多段階停止を実践し、より慎重に安全確認することで事故防止に努めたいと思います」と感想を語った。

※いきいき運転講座=社会学や交通心理学、脳科学などの専門家と構成した自工会の委員会、3年間の研究開発と普及ツール作成で平成20年に完成。高齢運転者のみならず歩行者や自転車利用者にも活用でき、平成30年7月には普及版「お試しセット」を追加した。



タブレット端末を使って、クルマの停止位置を確認してもらう



タブレット端末に表示される映像。停止状態を停止線横と、歩道を通行する歩行者目線の2カ所で撮影



インストラクターが見通しの悪い交差点での多段階停止の必要性を説明



他のドライバーの行動を見ながら自分の運転を振り返る「いきいき運転講座」

Safety Info.

インフォメーション②

2018年Honda安全運転普及本部年末ご挨拶会開催



2018年の主な安全運転普及活動が紹介された

昨年12月7日、Honda 青山ビル（東京都港区）にて「2018年Honda安全運転普及本部年末ご挨拶会」が開催され、交通関係者約300名が参加した。

報告会では八郷隆弘・本田技研工業（株）代

表取締役社長が「交通安全は“ヒト”が中心である以上、教育や啓発の積み重ねが必要不可欠であり、たいへん地道な活動であることはいうまでもありません。Hondaの交通安全教育は安全運転普及本部が中心となり、“ヒト”

に焦点を当てた様々な取り組みを継続してまいりました。これは行政、販売会社、地域社会など多くの方々との連携の上、幼児から高齢者まで生涯教育として安全意識の向上、スキルアップ、事故に遭わないための行動改善をめざすものです。Hondaは今年、創業70周年を迎えました。これは多くの皆様に商品、サービスをご愛顧いただき、安全運転普及活動に対するご理解とご支援をいただいた一つひとつの積み重ねの結果であると実感しております。これからも交通事故ゼロ社会の実現をリードし、すべての交通参加者が事故に遭わない社会をめざし、技術を進化させ、より一層の安全運転普及活動に努めてまいります」と挨拶。

続いて、中嶋英彦・本田技研工業（株）安全運転普及本部事務局長が「安全運転支援システムの正しい理解の普及（Honda SENSING）」「自身の運転行動を振り返るプログラム（高齢運転者向け）」「交通安全教育・啓発プログラムの開発（幼児の保護者向け）」など2018年の主な取り組みについて映像を交えて紹介した。

最後に、来賓を代表して北村博文・警察庁交通局長が挨拶。「クルマの進化、環境の変化に合わせて、Hondaが“ヒト”に焦点を当てた活動を各分野で取り組んでいることがよくわかりました。警察では現在、信号機のない横断歩道における歩行者優先を徹底する取り組みを進めているところです。このような対策の成果を上げるため、従来にも増して関係機関・団体

の方々との連携を強化して国民一人ひとりの交通安全意識の高揚を図ってまいりたいと考えています。Honda安全運転普及本部におかれましても引き続き、先進性・独自性のある活動を推進していただけるようお願い申し上げます」と述べた。

報告会の後には、懇談会が開かれ、交通関係者の情報交換の場となった



八郷隆弘・本田技研工業（株）代表取締役社長



北村博文・警察庁交通局長